

2. 明石公園・明石城における景観形成

2-1. 明石公園・明石城における景観資源

計画対象区域における景観資源は、①石垣、②櫓（坤櫓・巽櫓）、③既存樹木、④芝生、⑤外堀、⑥桜堀である。

本計画では、これら景観資源のなかでも特に明石城の魅力であり、全国有数と言われる東西 380mに連なる①石垣や、国指定重要文化財に指定されている②櫓（坤櫓・巽櫓）、明石城の景観に趣を添える③既存樹木や④芝生が調和した景観形成方策について検討する。

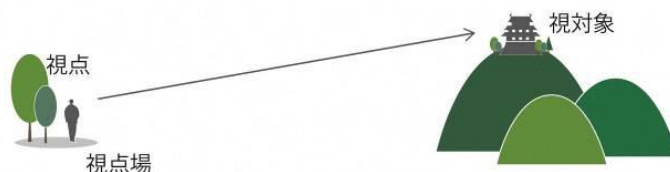
①石垣	②櫓（坤櫓・巽櫓）
	
③既存樹木	④芝生
	
⑤外堀	⑥桜堀
	

2-2. 景観の分類

2-2-1 景観の捉え方

一般に視点と外的な対象との間の視知覚的な関係性と捉えられる。

参考文献：樋口忠彦（1975）『景観の構造-ランドスケープとしての日本の空間』.技報堂出版



2-2-2 景観の一般的な分類

(1) 視点の静動による分類

- ①シーン景観 …ある一点において一方向を向いた観察者の景観を想定しており、風景写真や風景画等の表象とオーバーラップした便宜上の概念。
- ②シーケンス景観 …視点の移動に伴って継起的に変化する景観を説明する概念。

参考文献：景観デザイン研究会（1998）『景観用語辞典』

(2) 視界の広がり度合いによる分類

- ①ヴィスタ …終点あるいは主要な目的物へ向かって方向が定められた眺め
- ②パノラマ …あらゆる角度で見られる全景（山頂からの眺望など）

参考文献：ジョン・オームスビー・サイモンズ/バリー・Wスターク（2010）『ランドスケープアーキテクチャ 環境計画とランドスケープデザイン』



ヴィスタ



パノラマ

(3) 視点から視対象までの距離による分類

①近景（近距離景）

距離：～0.3km

特徴：一本一本の樹木の葉、幹、あるいは枝ぶりなどの特徴が、視覚的に意味を持つ領域。

②中景（中距離景）

距離：0.3km～3km

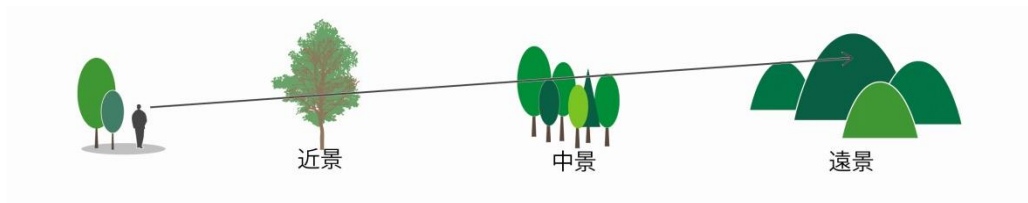
特徴：一本一本の樹木のアウトラインすなわち樹冠は認識できるが、テクスチャーの単位は、一本一本の樹木となり、異種の樹木あるいは樹木群があやをなす領域。最もランドスケープ的な形姿が展開される領域でもある。

③遠景（遠距離景）

距離：3km～

特徴：一本一本の樹木のアウトラインはもはや捉えることができない。ランドスケープにおいては、主として背景としての役割をつとめることになる。

参考文献：樋口忠彦（1975）『景観の構造-ランドスケープとしての日本の空間』.技報堂出版



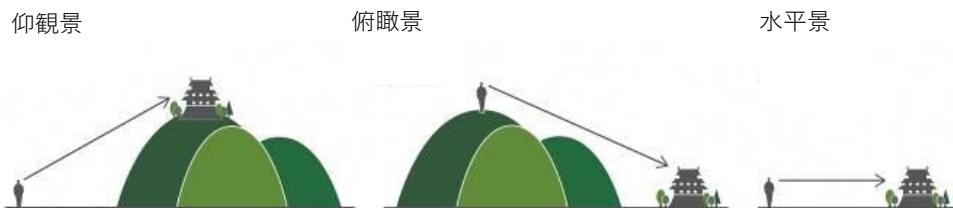
（4）視対象と視点の角度による分類

①仰観景 …視点から視対象を見上げる場合

②俯瞰景 …視点から視対象を見下ろす場合

③水平景 …視点と視対象が同じ高さの場合

参考文献：樋口忠彦（1975）『景観の構造-ランドスケープとしての日本の空間』.技報堂出版
景観デザイン研究会（1998）『景観用語辞典』



（5）構図的概念による分類

①主景…見せ場となるポイント、眺望の焦点

②添景…全体を引き立たせるための人、物

参考文献：樋口忠彦（1975）『景観の構造-ランドスケープとしての日本の空間』.技報堂出版

（6）その他

その他にも倒景、透景、借景など、さまざまな種類がある。

参考文献：樋口忠彦（1975）『景観の構造-ランドスケープとしての日本の空間』.技報堂出版

2-2-3 明石公園・明石城における景観の分類

(1) 視点の静動による分類

① シーン景観

…明石城の石垣や櫓を眺望できる景観。
来園者が立ち止まり眺望を楽しむと想定される場所からの眺望。視点場。



シーン景観

② シークエンス景観

…園内を散策する際に見る、動的・連続的な景観。



手前の樹木が視界を遮り、石垣・櫓が視認できない。



歩く



視界を遮っていた大径木通り過ぎたことにより、石垣・櫓が若干視認できるようになる



歩く



さらに移動することにより、樹木と視対象の位置関係が変わり、石垣・櫓が障害なく視認できるようになる。

シークエンス景観

(2) 視界の広がり度合いによる分類

① ヴィスタ …明石公園には主要な目的物（櫓）に向かって軸線が通った景観は存在しない。そのため、本計画ではヴィスタについては考慮しないものとする。

② パノラマ …本丸から園内を一望できる地点からの眺望。



パノラマ景観

(3) 視点から視対象までの距離による分類

近景・中景・遠景の考え方は、海や山並みなど、大規模なものを対象としているが、本計画において策定する主要な視対象は石垣・櫓であり、海や山並みに比べるとはるかに小規模なものである。したがって、本計画においては、近景・中景・遠景を以下のように設定する。

①近景

距離：対象物の直近

特徴：石垣や櫓を構成する石材の細部まで確認が可能な距離および樹木一本程度で櫓の視認性が害される距離からの眺望。対象物の直近とする。



近景

②中景

距離：主に園内

特徴：石垣の細部までは確認できないが、対象物の概ね全域を見渡せる距離からの眺望。主に園内からの眺望とする。



中景

③中(遠)景

距離：園外

特徴：風景の一部として石垣を確認できる位置からの眺望。園外からの眺望とする。



中(遠)景

(4) 視対象と視点の角度による分類

①仰観景 …櫓直下からの景観など。石垣・櫓を見上げる景観。

②俯瞰景 …本丸展望デッキから明石公園を見下ろす景観など。視対象は石垣・櫓ではない。

③水平景 …JR 明石駅ホームからの景観など。石垣・櫓と視線が同じ高さの景観。



仰観景



俯瞰景



水平景

(5) 構図的概念による分類

①主景 …本計画では主に石垣および櫓を主景とする。

②添景 …本計画では主に樹木を添景とする。



主景・添景

2-3. 明石公園・明石城の目指す景観

2-3-1 城と緑・花による景観形成例

他城では、城郭構造物と樹木・花により次のような景観が形成されている。

	<p>城名 : 弘前城</p> <p>所在地 : 青森県弘前市</p> <p>特徴 : <u>桜により城郭を演出した景観</u></p> <p>堀の外側は桜並木が形成されており、周辺環境と城郭の調和を図っている。一方内側には樹木が少なく、櫓が視認しやすい。</p>
	<p>城名 : 丸亀城</p> <p>所在地 : 香川県丸亀市</p> <p>特徴 : <u>曲輪上の樹木の上に石垣を見せ、石垣の立体感が表現された景観</u></p> <p>マツをはじめとした周囲の樹木が添景となり、主景である城郭を周辺環境と調和させている。</p>
	<p>城名 : 今治城</p> <p>所在地 : 愛媛県今治市</p> <p>特徴 : <u>透景を見せることにより、城と緑が調和した景観</u></p> <p>石垣周辺に高木が点在し、樹木の間から石垣が視認できる。</p>

2-3-2 明石城の過去の姿

(1) 江戸時代

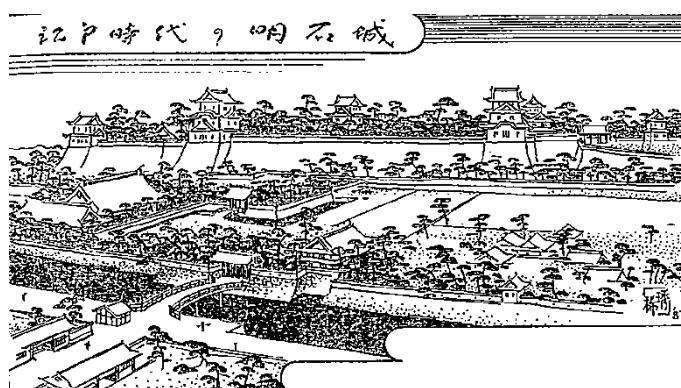
江戸時代の明石城の様子を伝えるものとして「西海航路絵巻」(江戸時代後期)がある。航路絵巻は、航行の際目印になるように正確に描かれている。航路絵巻によれば、石垣周辺に適度に樹木が植えられており、明石城は、櫓、石垣、樹木から認識されていたことがわかる。

また、「日本名勝図絵」によると、主に石垣上部(本丸)や土塁・土塀のそばに植えられており、樹木の上部に石垣が見える景観を呈している。



西海航路絵巻

(兵庫県立歴史博物館蔵)



日本名勝図絵

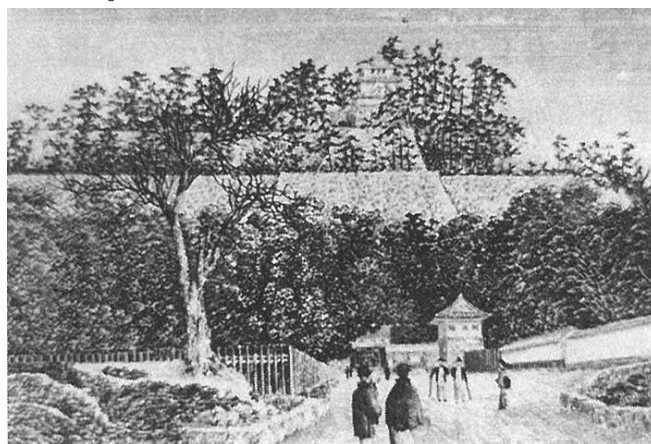
出典：辰巳信人「歴史の証人 明石公園」
(江戸時代の景観を描いているが、
1980年代に描かれたものである)

(2) 明治時代

明治6年(1873)の廃城以降、櫓解体などを乗り越え、民営「明石公園」として親しまれていた明石城跡は、明治30年(1897)皇太子(後の大正天皇)の御用邸候補地として選出され御料地となった。また、開園以前に英国人が「明石城跡を公園にしたい」と借用を願い出たことから、景観に優れていたことが読み取れる。

下図より、マツのみの景観であった江戸時代に比べ、樹種が多様となったことが読み取れ、樹木量は圧倒的に増加しているが、樹木の上部に櫓・石垣が存在しており、櫓、石垣の高さや長さ、隅部が確認できる景観を呈している。

御料地として選定された理由も、明石城と緑が織りなす風致が、御用邸として相応しいと判断されたためである。



明治時代の様子(明治23年の銅版画)

2-3-3 目指す景観

西海航路絵巻、日本名勝図絵を参考にすると、江戸時代、明石城にはマツが植えられていた、緑豊かな城であったと思われる。また、西海航路絵巻によれば、石垣周辺では適度にマツが植えられた絵となっており、明石城は、櫓、石垣、マツが特徴的な姿として認識されていたことがわかる。従って、江戸時代の明石城はマツ等の緑の上に石垣や櫓の姿が見える景観であったと想定される。

明治時代以後の明石城は、景観資料（名勝図絵、絵葉書等）によると、樹種が多様になり、石垣下部は樹木の繁茂により視認しづらくなっているが、櫓や石垣の長さ、隅部は確認できる。また、外国人からの借用願、民営公園化、御料地化等の経緯より考察すると、石垣・櫓が主景、多様な樹種が添景となった、象徴的な景観が公園として評価されていたと考えられる。

現在の明石城は、公園としての利用度が高く、多くの方に利用され「都会のオアシス」として親しまれている。明治時代と比較して樹種が多様になっており、樹木がより繁茂しているため、史跡エリア全体において石垣・櫓が視認しづらい状況となっている。

明石公園は、平成30年には、明治150年、兵庫県政150周年、県立明石公園100周年、平成31年には、築城400周年など記念の年を迎える。

特に県では、平成31年に迎える築城400周年の記念事業にあわせ、明石城の魅力である石垣や櫓を広く情報発信することとしている。

以上より、本計画では明石城跡の公園化の経緯や現在の利用状況を踏まえ、石垣や櫓を主景、既存樹木を添景として活かしていた明治時代の明石城と公園の多様な緑が調和し、かつ明石城の魅力である櫓や石垣が感じられる景観を目指すものとする。

本計画における、景観テーマを設定する。

**城と公園の多様な緑とが調和し、
かつ明石城の魅力を感じられる
「城を活かした公園の景観」**

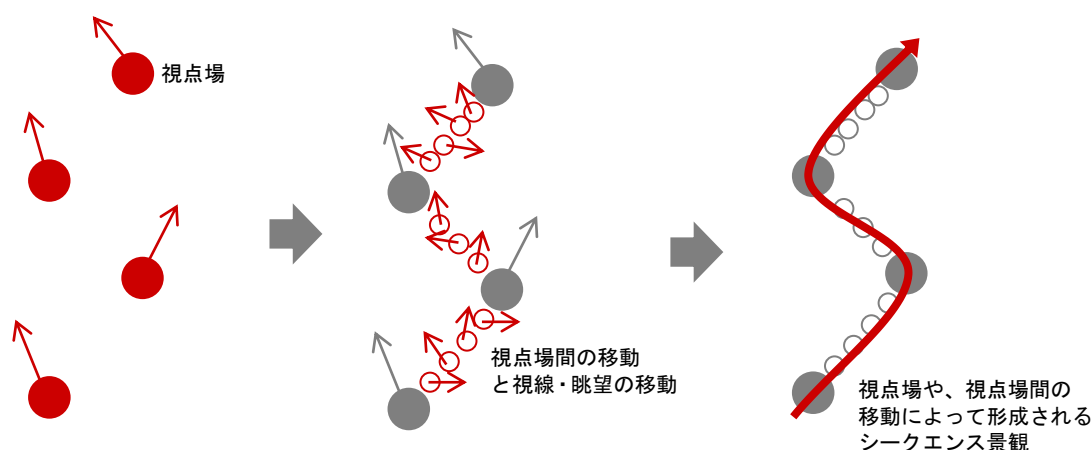
2-3-4 景観形成の基本的な考え方

明石城を見るために明石公園を訪れる人は、城郭を周遊しながら公園の中にある石垣・櫓のある景観を楽しんでいる。また城郭を周遊する際、移動している間も、刻々と変化する新たな眺望（シーン景観）を視認している。

そしてそれらシーン景観の集合体であり、目的地から目的地（視点場から視点場）への移動に伴い変化する連続的な景観が、動的な景観であると考えられる。

明石公園においては特徴的な地点で静的な景観が重要であるのと同時に、移動により刻々と変化する動的な景観（シークエンス景観）も重要であると考えられる。

したがって、本計画では、主要動線上の主要な地点（視点場）で明石城の魅力である櫓や石垣を観ていただくとともに、主要動線上を移動することで明石城の雰囲気を感じつつ、変化する明石城の景観を楽しんでいただく、シークエンス景観を創出することを目指すものとする。



シークエンス景観と視点場の関係

※シークエンス景観設定の留意事項

ジョン・オームスビー・サイモンズ/バリー・W. スターク（2010）『ランドスケープアーキテクチャ 環境計画とランドスケープデザイン』

・必ずしも正面から見る必要はなく、決められた方向からアプローチする必要はない。

・鑑賞者の移動に応じて眺めが展開するように計画する。

ケヴィン・リンチ（1987）『[新版]敷地計画の技法』

・1つのシーン（ビュー）よりも、連続するシーン（集積効果）の方が重要である。観察者が狭いスロットから広がりにてきた時の解放感は、強い印象を与える。

・瞬間をとるとバランスが欠けているかもしれない。しかしそれは大したことではない。時間全体のなかで補正、バランスが取ればよい。

2-4. 景観形成方針

2-4-1 城を活かした公園景観の形成

本計画では以下により、城と公園の緑が調和し、かつ、明石城の魅力を感じられる明石公園の景観形成を図るものとする。

■創出する景観

- 石垣・櫓が主景、多様な公園の樹木が添景となった景観が評価されていた明治時代の景観を目指す。
- シークエンス景観（動的・連続的な景観）形成のため、景観上、主要動線において明石城の景観を観ていただくストーリーを設定する。また、主要動線上の明石城の景観上、特徴的な場所を視点場（中（遠）景、中景、近景）として設定する。
- 主要動線上では、緑の奥に石垣や櫓が見え隠れする景観（透景）を創出し、主要動線を移動することで、動線上で明石城の雰囲気を感じられ変化する明石城の景観を楽しんでもらえるようにする。
- 視点場では、石垣・櫓を主景とし、適切に整備された公園の緑や花が主景を引き立てる添景となった景観を創出する。

■景観整備の方法

- 明石城の重要な景観資源である石垣など 歴史的遺構保全のため遺構に影響を及ぼす樹木は除伐する。（これまで、石垣及び景観の保全を目的とした管理は行ってこなかった。）
- 視点場や主要導線上の景観整備を、樹木の除伐・剪定により行う。
- 明石公園がさくら名所 100 選の地（日本さくらの会）に選定されるなど、明石公園の特徴的な景観を構成するサクラは、除伐・選定せず、老朽化したサクラの樹勢を回復するなど保全に努める。
- 樹木の除伐にあたっては、希少種の生育・生息環境に配慮する。

□その他（留意事項など）

- 明石公園の景観を楽しんでいただけるよう、案内標識等公園施設の景観に関する課題を整理する。

2-4-2 景観形成フロー

